

花火

小林まもる

口をあけたまま  
人が飲み込むものは  
闇の深さだ  
花火が自らの華を  
裂き続けるのは  
いのちの闇の  
時間に向かつてだ

破裂する華の轟きに  
その都度堪えようもなく  
崩れ逝く生身の意識  
おのれの花火よ

そのとき人は  
立ったまま  
下痢をもらしながら  
おのれのいのち  
その歴史に立つ

明滅する意識の荷電  
重く垂れ流した  
その下痢を  
色つきの夢のように  
見届けねばならない